



イペアンロー！ (いただきます)

今回は、フンペ（クジラ）料理をしようかします。

昔、北海道や樺太（サハリン）の海沿いでは、フンペがたくさん見られました。アイヌ民族は、大きなフンペをどのようにとったのでしょうか？ やりに似た道具「キテ（もり）」を使って漁をした記録も残



「フンペ」クジラさし身やスープに

っていますが、多くは、レブンカムイ（シャチ）に追われたり、流水に閉じこめられたりして浅瀬に迷いこみ、海岸に乗り上げた「寄りクジラ」を食べたようです。

突然、浜辺に現れた小山のようなフンペは、海沿いに住んでいたアイヌたちの目に、カムイからの大きなおくり物と映ったことでしょう。

コタン（村）のみんなで肉やあぶら身を切り分け、肉はさし身や、山菜を入れたオハウ（スープ）にして食べました。また、保存できるように塩をつけ、けむりでいぶしながらかわかしてベーコンをつくり、米や野菜と交換しました。ひれは干してだしを取り、あぶら身はいため物用の油や、ご飯にかけるタレにもしました。

食べる以外にもフンペは大活躍。あぶらはランプの燃料に。丈夫なひげはイタオマチャという大型のふねを造るとき、板をとじ合わせるのに使い、漁の道具の材料にもしました。骨と筋肉をつなぐ「けん」は、チェツケレ（サケの皮で作るくつ）をとじる糸や、テシマ（かんじき）のひも、楽器トンコリの「げん」などに使いました。

菜の花のおひなさま

近畿地方に伝わる遊び



「フムフム」はアイヌ語でのあいづち

和人のひな祭りは、女の子のすこやかな成長をねがう行事ですね。ひな祭りは、いくつかの習慣が合わさって今の形になったと言われています。昔は、草やわらで人形を作って遊んだそうで、今でも草花びなを作る地域があります。

人形で体をなでたり、まくらもとに置いたりして、体についた悪いものを移して川に流す、おはらいも行われました。古代の中国には3月の初めに水辺で身を清める習慣があり、これが日本に伝わって、3月に人形を流すようになったということです。

江戸時代には、この行事は女性のもと考えられるようになります。ひな人形と結びつき、今のようないくつかの人形が生まれました。

アイヌ民族にも、子どもを守るための人形があります。北海道のアイヌ文化には「人形を作ってはいけない」という考えがありましたが、樺太（サハリン）ではお守りとして、木彫りの「ニポポ」などいろいろな人形が見られます。樺太アイヌの人形の形や使い方は、オホーツク海沿いやロシアのアムール川流域に住む人たちの文化と似ているところがあります。

たとえば、樺太の東側の白浜村では昭和20年ごろまで、子どもの守り神がまつられていました。それは、木でできたおじいさんとおばあさんの人形をイナウ（木をけずってふさにした、おいのりの道具）で包んだものでした。西

3月3日ひな祭り

ニポポ

樺太アイヌのお守り人形

人形いろいろ

子どもの成長や無事いのる



側の来知志村では、子どもが自分のお守りの人形の口に毎日、ご飯を付けていたそうです。

また、ポンニポポという小指の先ほどの鼻奥のない人形を、子どもの服のえりなどにぬいつけることもありました。病氣など良くない

ものが子どもに近づくと、身代わりになってくれるとか。

人形は、子どもにとっては遊び相手であり、大人にとっては「子どもを守ってほしい」という、いのりがこもったものなのですね。

きょうの と ば

●こよみ

江戸時代まで、ひな祭りは今の4月に行われていました。

アジアでは昔、多くの国が月の動きをもとにしたこよみ（太陰暦）を使っていた。ヨーロッパでは太陽の動きを基準にしたこよみ（太陽暦）が主に使われており、日本は明治時代にヨーロッパに合わせました。

この新しいこよみは、元のこよみよりも月の切りかわりが1カ月ほど早かったため、ひな祭りをする時期も早まったというわけです。

アイヌ民族にも、月の動きをもとにした12カ月のこよみがあります。それぞれの月は、トエタンネ（白が長くなる＝3月）などと、季節の変化を表す名前がついています。

●おもちゃ・かざり・お守り

ひなかざりには、食器や弓矢、楽器など、いろいろな小物があります。こうしたミニチュアは部屋にかざれば見て楽しむものになりますが、子どもが持てば、ままごとや「戦いごっこ」に使うおもちゃにもなります。

アイヌ民族や、樺太・アムール地方のニブ民族には、子どもが生まれると、いろいろな道具のミニチュアを作ってプレゼントしたり、子どもがねているそばにかざったりする習慣がありました。

おもちゃとかざりとお守りは、言葉の上では全くちがうものようですが、実はとても近いものかもしれません。



知里真志保は、1909年（明治42年）の今の登別市に生まれた言語学者です。東京帝国大学（今の東京大学）を卒業し、樺太（サハリン）で高等女学校の先生をして、戦後、北海道大学文学部の教授となりました。北海道や樺太のアイヌ語を研究し、辞典をつくりました。

おばの金成マツは、たくさんのユカラ（英雄物語）をローマ字で書き残した人です。マツは、妹のナミ（真志保の母）とともに、イギリス人伝道師ジョン・パチラーが開いた函館の愛隣学校で学びました。中学生の真志保が、マツの使った英語の教科書を手に取ったことが、言語に興味をもつきっかけと言えます。

この本は真志保のエッセー集です。70年前に書かれた「アイヌ語のおもしろさ」という文章にこうあります。

「ミナ・コヤイクス」(mina-koyaykus)という表現がある。直訳すれば「笑うこと

和人は舟を食う

知里 真志保著

が・できない」ということである。「笑うことができない」ならば、「笑わないでムツツリとしている」のかと思えば、事実は「腹を抱えて笑う」ことである。「これ以上笑いたくても笑えない」というのが、このアイヌ語の真意である。

そして、こう結びます。アイヌ語と日本語では、物の考え方に大きな違いがあって、それがアイヌ語やアイヌ文化を分りにくくしている。けれども、言語を学ぶことの大切さとおもしろさは、まさにそこにある一。

ことばの背景となる文化を分かってこそ、ことばの本当のおもしろさが分かるのです。

(2000年 北海道出版企画センター、1100円)

